

〈いのちを全うするとうづうこと〉

ジャーナリスト
松本 侑壬子

誰しもこの世に生まれてきたからには、命を大切に全うしたいものだ。だが、人は思いもかけない災害や病魔に襲われることも。幸いに一命をとりとめても、その後の障害をいかに乗り越えるか…。この映画は、思いもよらぬ不治の病に倒れた若者が、愛する人らに支えられ、絶望の淵から車椅子生活のまま積極的に自らの人生を生きた六四年の生涯を描く。美しい英国の田園風景の中で家族、友人・知人、専門家らとともに繰り広げる知恵と工夫と愛に満ちた物語。実話に基づく力強くさわやかな感動作だ。

然体調異変で倒れる。診断結果は、ポリオ。首から下は完全にマヒし、自力で呼吸もできない。医師は二八歳のロビンに「余命数カ月」と宣言する。翌一九六〇年、長男ジョンナサン誕生。ダイアナは夫と赤ん坊を連れ帰国する。だが、専門病院で人工呼吸器につながれたロビンは「死にたい」というばかりで我が子の顔さえ見ようとしめない。

ダイアナは「ここから出たい」という夫の願望に応えるべく、郊外の古い屋敷を値切って購入、看護師から人工呼吸器の操作を学ぶと、医師の反対を無視してロビンを退院させる。家族や愛犬に迎えられて、初めてロビンに笑顔が戻る。大学教授の友人テディは、人工呼吸器の改良を考え、ベビーカーからヒントを得たロビンのアイデアを得て、手づくりで人工呼吸器付きの車椅子を完成する。こうして、外出が可能になったロビンは、車椅子が乗せられるよう自動車の

改良、またその車ごと貨物飛行機に乗せてスペインまでの外国旅行を実現する。まるで、人生は大冒険だ、と言わんばかりに一つひとつ夢を叶えるロビン。

ダイアナは、身も心もまさに一心同体でロビンの人生に伴走する。そんな両親の姿を目の当たりにしながら成長したジョンナサンも、やがて素晴らしい父の手足となる喜びを母と分かち合うようになる。「世界一幸せだ」と胸を張るロビンは、自分と同じ境遇の人たちにも幸せを取り戻してもらいたいと願う。権威ある学会会議に招かれれば、もともと患者本位の研究や医療を訴え、自らも医師や科学者とともに障害者の生活をより良いものにする電子器具や装置の開発に携わった。二八歳の時にわずか数カ月の命と宣告されてから三六年、ロビンの人生にこれほどまでに明るさとエネルギーをもたらしたものに、想いを馳せずにはいられない。

ちなみに、この映画の製作者ジョンナサン・カヴェンディッシュは、ロビンとダイアナ夫妻の実際の息子である。数々の受賞作・ヒット作で知られる大プロデューサーだが、初めて両親をモデルに「障害があっても幸せに生きられること」を映画化した。



『ブレス しあわせの呼吸』

イギリス映画(118分)

監督：アンディ・サーキス

製作：ジョンナサン・カヴェンディッシュ

出演：アンドリュー・ガーフィールド、クレア・フォイ、トム・ホルンダーほか

9月7日より角川シネマ有楽町ほか全国順次ロードショー

© 2017 Breathe Films Limited, British Broadcasting Corporation and The British Film Institute. All Rights Reserved